



Title	2006年度 岩見沢校学士論文等概要
Author(s)	
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 28: 69-75
Issue Date	2007-02
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8819
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

2006年度 岩見沢校学士論文等概要

〈学校教員養成課程〉

教育発達臨床系

学校教育

今年度は、以下のテーマで14の学士論文が取り組まれた。「現代人が失いつつある力 社会力」「ドラマによる表現活動 その理論と実践」「教師・教師像 今求められる教師とは」「教育史上における『国語科』の意味、役割—1900年小学校『国語科』の制定」「羽仁もと子の教育論—生活主義思想とその実践—」「ゆとり教育を主軸とする現状の学校教育制度についての考察」「Japanese EFL learner's attention, problem-solving strategies in argument and narrative writing tasks」「国際理解教育についての—考察」「コア理論の有用性に関する研究」「戦後北海道における学校統廃合の研究」「明治期におけるヘルバルト教育学に関する研究」「障害理解教育のカリキュラム開発に関する研究」「北海道の小中学校における特別支援教育システムと実践の検討」「言語発達遅滞児における仲間・大人とのコミュニケーション機能分析」。

心理学

本年度は以下の論文9編が提出された。「大学生と小学生における叱られた経験の検討」「親密な関係における対人葛藤」「恋愛と友情—恋人と親しい異性の友人との比較—」「自己敗北性パーソナリティにおける対人関係の研究」「携帯メールの利用とパーソナリティ」「生理的覚醒時における対人魅力の研究」「心理的アンフェアの発生プロセスとその解消」「中国の作文指導についての研究—看図作文—」「4コマまんがを活用した作文指導について」。いずれも実証的な研究である。また、有意義な問題意識に基づく研究も多かった。

総合教育研究室

2006年度は9本の論文が提出された。第一研究室は「教育技術の法則化運動」とその批判—「授業実践の技術」と「教育内容」—、現在における「子ども観の研究」—「子どもの権利」からの「子ども観」の再構築—、発問論とその機能の分析と考察—「冬景色」、「出口」の授業を中心に—、小学校における絵本実践の可能性について—絵本の教育的機能をふまえて—の4本が、第二研究室は、民俗芸能「荒馬」の教材化の基本的観点を探る—沼倉学「教材化試案」と「学校文化論Ⅰ」をもとに—、学習指導要領変換とその現状からみる運動部活動の問題点と望ましいあり方に関する—考察、子どもの携帯電話所持の是非—携帯電話が子どもに与えた影響から探る—、学生の反応から考えられる包括的性教育の今後の課題、北海道教育大学岩見沢校学生における食意識と食行動の実態と問題点—食意識と食行動をどう形成するか—の5本がそれぞれ提出された。

社会・言語教育系

国 語 近代文学は「芥川龍之介論～児童文学の世界～」 「三島由紀夫作『近代能楽集』研究」 「梶井基次郎論～湯ヶ島での作品を通して～」 「野坂昭如『エロ事師たち』論」の4篇、国語学（日本語学） 「現代日本語における位相語の研究—コンピュータネットワーク上の用語について—」 「現代日本語における位相語—専門語を中心に—」 「山形県大石田方言の研究～名詞の格を中心に～」 の3篇、国語科教育は「入門期のひらがな指導」 「説明的な文章指導実践の考察」 の2篇、計9篇の論文が提出された。

書 写 今年度は「顔真卿の生涯とその影響」と「毛筆書写における手本に関する一考察」という論文二編が提出された。前者は唐という時代において顔真卿が残した足跡についての考察を試みている。後者は明治時代から現代までの書写書道教育の手本の変遷を踏まえて、これからの書写書道教育のあり方についての一考察を行っている。

外 国 語 本年度は文学関係10篇、教育関係2篇の論文が提出された。内訳はイギリス文学3篇、アメリカ文学3篇、フランス文学1篇、ドイツ文学1篇、ユダヤ文学1篇、南アフリカ文学1篇、英語教育2篇であった。紙面の都合上文学関係は主要な研究作品名と筆者名のみを、教育関係は論文名と筆者名を紹介する。

Dr. Jekyll and Mr. Hyde (山本), *George's Marvelous Medicine and The Twits* (田村), *The Power and the Glory* (江田), *The Wizard of Oz* (南里), *Slaughterhouse-Five* (尾間谷), *The Phantom of the Opera* (阿部), *Grimms' Fairy Tales* (内田), *A Simple Story* (ハイサン), *Burger's Daughter* (村田), "How Does Pre-task Planning Influence Negotiation of Meaning?" (小関), "Incidental Vocabulary learning: The Roles of Inferencing Strategies and Attention-drawing Activities" (石井)

歴 史 本年度は、日本史分野4編、外国史分野4編の計8編の学士論文が提出された。その論題は、以下の通りである。山本民「近世蝦夷地ソウヤ場所における交易：玉虫左太夫『入北記』を中心に」、吉川ゆかり「元老が果たした役割と意義：内閣制度発足前後にみる元老の形成過程から」、佐伯歌奈子「『憲政有終の美を済す』ことを目指した浜口雄幸の国家構想：政策実行過程における事件の背景を手がかりに」、宇居要「国民生活と常会：十五年戦争期の北海道の事例を中心に」、篠村菜央「古代エジプトの王権制度の謎：王女による王位継承の視点から」、江田靖史「中世ヨーロッパの死生観」、佐藤奈央「女帝エカテリーナの政策：エカテリーナ2世は『大帝』と呼ぶことができるのか」、関谷浩幸「なぜ朝鮮へ？：日本の対外出兵の過程から」日本史では一次史料の分析を交えつつ論を進めようとする志向性が、外国史では同時代的関心から歴史事象へアプローチしようとする傾向が見られたのは例年通り。いずれも一定の水準に達した叙述であると判断された。論文作成で得られた調査・分析・叙述の経験を、今後仕事や社会生活に活かしていくことを望むものである。

法 律 2006年度4年生は男子学生3名である。こつこつと自分が決めたテーマを勉強し、

論文作成過程を楽しんでいるかのような様子は、指導にあたって嬉しく、頼もしかった。結果的にも、3名ともかなりレベルの高い卒業論文を完成させることができた。『男女の働き方に関する一考察』は、今年の労働契約法法案、パート労働法改正も視野に入れ、女性労働者が有期雇用労働者に多い現状を批判的に論じた。『安楽死・尊厳死に関しての法倫理学的考察』は、様々な文献にあたり、「死ぬ権利」について考察を深めることで、安楽死・尊厳死に対する自己の立場を明確にすることができた。『憲法9条とわが国の自衛権に関する法律学的研究』は、小泉政権時に自衛隊の位置づけが大きく変えられたことを受け、理論的な研究のほか、イラクに派遣された自衛隊員に実際に取材する等、理論と実態の両面からの研究成果が生きた作である。

社会学

社会学グループでは3編が提出された。論文「現代社会における少年犯罪・非行の一考察」は、諸資料に丹念にあたり、丁寧な考察を加えたもので、実証的な把握としてすぐれているが、背景的な社会的変容についての理論的考察に対する吟味にいま少し期待したいものがあつた。論文「民族紛争と帰属意識」は、ユーゴスラビア紛争を中軸にエスニシティやナショナリズムの諸問題を論じたものもので、民族紛争をめぐる複雑な問題諸連関の提示という点で教えられるところがあるが、それらの現実的分析と、帰属意識から多文化主義にいたる先行研究の理論的蓄積との関連が必ずしも明瞭でないうらみがある。論文「社会保障の比較論的考察」は、社会保障の基本理念およびとくに貧困問題と高齢者問題にしぼって、スウェーデン、アメリカ、日本の比較研究を行つたもので、資料の収集と分析が相当程度に行き届いており、説得的である。

倫理学

今年度の卒業生は二名で、卒業論文は、『現代カリスマ論』ならびに『サルトルにおける「アンガジュマン」と「責任」の思想～教育におけるアンガジュマンと責任とは～』の二篇であつた。前者は、ヒトラーから現在の「カリスマモデル」にいたる様々な「カリスマ」を類型化し、その形成メカニズムを社会学的・心理学的に分析した力作である。後者は、「アンガジュマン」と「責任」というサルトルの基本的な考え方を教育現場に生かそうとした意欲作である。どちらの論文も、古典的なテキストを踏まえつつ、自身の見解を自分の言葉で分かりやすく表現しようと努めた点で、非常に高く評価できるだろう。

社会科教育

本年度の提出論文は2件である。「これからの人権教育～日々の授業で学びの協同体づくり～」は、同和教育の変遷を整理するとともに、大阪府池田市立細河中学校の25年間の実践を分析して、授業における人間関係づくりと協同的な学びの構築が、同校のめざす人権教育であることを考察した。「空港に求められる新たな役割～地域のゲートウェーを目指して～」は、現代社会に不可欠の航空輸送の教材価値をさぐるべく、空港の機能を地域づくり構想のなかで考察したものである。

自然・生活教育系

物 理 学 本年度の学士論文は次の通りである。「雪結晶のフラクタル次元」(泉 達也)は、大雪山系旭岳で撮影した雪結晶の写真などから、カバー法により雪結晶のフラクタル次元を求めた。そして、それらの値により雪結晶の分類を行い、樹枝状等という従来の分類と比較を試みたものである。「フィンランドの理科教育」(高橋礼恵)は、近年 OECD 学習到達度調査の好成績で注目を集めているフィンランドの教育について、小・中学校の理科教科書の物理分野を中心に日本の新旧教科書と比較をし、考察したものである。「十二花雪結晶の成因について」(谷藤雅英)は、正規の雪結晶とは異なる十二花雪結晶について、これまでの観察例及び新たに撮影した顕微鏡写真の解析から形態的な特徴をまとめ、その成因について考察を行ったものである。

化 学 以下の3件の卒業研究が報告された。
東海林美穂：スポーツドリンク試料中の化学的酸素必要量測定
村上宏太：硫酸銅5水和物の昇温実験

生 物 (動物分野) 周防雄紀「フタホシコオロギ (*Gryllus bimaculatus*) の前・後翅における細胞死について」では、コオロギの翅細胞が羽化後細胞死を起こすかどうか検証した。その結果、前・後翅とも細胞死を起こすが、その時間経過が異なることが明らかになった。吉田敬乃「ノーベル賞受賞者研究内容の教科書への反映」では、生物分野におけるノーベル賞受賞者研究内容が戦後の高校生物の教科書でどのように取り扱われているか調査した。また、戦後の指導要領の変遷とノーベル賞受賞者研究内容の取り扱いの関係を考察した。増井晶子「キイロショウジョウバエ (*Drosophila melanogaster*) 翅表皮細胞プログラム細胞死における遺伝子制御機構」では、翅表皮細胞に早期に細胞死が誘導される Wrinkled 突然変異について解析し、この細胞死もカスパーゼを介して起こっていることを明らかにした。

地 学 2006年度の卒業論文は、樺戸山地南部当別町青山中央地域の新第三系の層序と古環境である。本研究の主要課題は、①「海成中新統金ノ沢層・望来層の区分と古環境」、②「調査地域周辺における新第三系の層序学的再検討」、③「調査地域の新第三系の微化石分析に基づく地質年代の決定」である。
①については、大型化石の産出が限定されており、十分な情報は得られなかった。
②に関しては、詳しい野外調査により、新第三系の層序関係をおおよそ確立することができた。また、③については、年代決定に有効な珪藻化石・有孔虫化石がほとんど産出せず、新第三系各層の詳細な地質年代を確定することができなかった。
以上、野外調査のデータに加えて、室内作業でも二三の重要なデータが得られたが、全般的にはデータ不足は否めず、考察や比較検討に今後の課題が認められた。

理 科 教 育 2006年度の理科教育研究室では、1) 岡本恒雄「論理的・協同的態度の育成を目的とするパッケージドプログラムの検討」、2) 神保研匠「環境問題における合意

形成学習—千歳川放水路問題を素材として」、3) 佐々木千加子「瀬棚層産有孔虫化石による同定学習教材」の3編が提出された。1) は、低学年以下を対象とするアメリカのパッケージドプログラムの活用について検討した。2) は環境と開発における異なる立場でどのように合意形勢を行なったら良いかを学ぶ教材を作成したもの。そして3) はこれまで作られていなかった有孔虫類の検索表を作成し、種の記載と実体顕微鏡写真を組み合わせたものである。

生活科学教育

以下の12本の学士論文が提出された。「地域における子ども社会とコミュニケーション能力」(岩野由香里)、「ジーンズスタイルと着用の内的要因に関する研究」(熊坂元宏)、「家庭内における子供の現状と家族コミュニケーション」(九門弘宣、柴田浩介)、「ペットボトルのリサイクルと環境教育」(越山絃州)、「高齢者の実態と学校教育での取り扱い」(小林健太郎)、「女性の結婚・子育てと社会環境に関する一考察」(柴崎佳菜)、「乳幼児服の材料に関する実験的研究」(下地紀子)、「被服の快適性と作業着衣系の保温特性評価」(庄司将彦)、「学校や家庭におけるセルフエスティーム教育について」(手繰悠一)、「消費者問題について」(中川原慎介)、「アマチュアスポーツ選手のスポーツにおける栄養摂取の重要性」(三上正一郎)、「学校における子供社会の成立についての一考察」(宮内太)

体育・芸術教育系

音 楽

本年度は、以下の10編の論文が提出された。石岡美香「日本のピアノ教育に対する提言—日本のピアノ教育の変遷における現状と今後の課題—」、上田友美「肢体不自由児の身体表現におけるミュージック・ムーブメントの可能性」、北麻衣子「移調楽器としてのクラリネットの歴史と発展における一考察」、小西正一郎「小学校低学年・中学年の器楽教育で今求められるもの—「吹く」楽器に視点を置いた器楽教育の改善—」、小沼修司「合唱指導に関する一考察」、真田有希子「音楽がもたらす情動的効果—悲しい楽曲による気分変化と聴取目的の実態—」、引地智子「小学校における合唱指導」、寶福伸恵「モーリス・ラヴェルの音楽—近代的要素と古典的要素の共存—」、若林ミカ「民族楽器としての「笛」の発展とその音楽の一考察」、野村啓介「吹奏楽初心者の為の指導の改善—一部活動におけるフレンチホルンを中心として—」

美 術

本年度は彫刻専攻1名、美術教育専攻2名の計3名。彫刻は具象による人物表現と肖像彫刻の歴史についての論文。彫刻はテラコッタも含め4点。表現技術の獲得とテーマの深化に4年間の成果が見られた。論文は肖像彫刻の歴史について古代から近世、近代、現代へと時代と表現の関わりがまとめられていた。美術教育の論文はグーグルに代表されるネットワーク・メディアの可能性について、それが目指す新たな社会変革について考察されており、コンピュータを肯定的に捉えていく方向は新鮮であった。

もう一遍はインテリア・デザイン史を押さえながら、インテリアの領域とアートの領域の相互作用について考察したもの。現代のアーティストがインテリア的手法

で行うインスタレーションの背景に現代人の「私」の喪失があるのではないかという考察は興味深いものであった。作品は写真による室内と風景のキュビズム的表現3点。もう一つは人体を直取りした石膏によるトルソの照明2点であった。

体 育

「バトミントン競技におけるルール改正が選手に与える影響についてーサービスポイント制からラリーポイント制への移行ー」(金丸明日香)、「高校サッカーにおける選手と指導者の意思疎通の差が競技成績に及ぼす影響」(本間清晃)、「本学生における高校時期から大学時期にかけての志向の変化が競技成績に及ぼす影響」(中川慎也)、「高校サッカーにおける地域環境がもたらすプレイスタイルに関するゲーム分析ー北海道と他の地域のサイドチェンジの比較からー」(益田 亘)、「マスターズスイミング参加者の価値意識に関するー考察ー北海道マスターズスイミング選手権大会参加者の調査を通じてー」(藤本祐子)、「中学校における体育科の体づくり運動の実態ー北海道の中学校体育教師の視点からー」(齋藤加奈子)、「教育系大学生の精神の健康と身体の健康とのかかわりーアダルトチルドレンに着目してー」(鹿野彩子)、「教育大学生における対人ストレスとアサーションとの関連」(丸山幸亮)

〈社会教育課程〉

教育学研究グループ

「裁判員制度導入による法教育の意義と展望に関する考察」(佐々木伸)、「日韓関係における懸念問題の考察」(伸洋宇)、「ミュージアムにおける指定管理者制度の導入について」(石塚奈々子)、「美人は痩せていることではない」(小野正恵)、「芸術文化における行政と市民団体・アート NPO の関わりに関する考察」(鈴木洋)、「個人情報保護に関する法律の考察」(沼田千)、「セクシャルマイノリティの人権問題ー同性婚問題を中心に」(北條 翼)、「格差社会が学力二極分化に及ぼす影響を教育基本法の観点から考察」(酒井美)

いずれも、現在社会への批判を含んだ力作であった。

文化人類学グループ

今年度の卒業論文提出は、以下の5点であった。佐々木翼「明治・大正期の新聞詩歌にみる大衆のアイヌ観：小樽新聞読者投稿欄から」、勝山理香「現代スピリチュアリズムにおける救い」、古村彬雄「岩木山信仰からみるカミサマ」。高橋麻美「魔女は死なない：現代のウィッチクラフト」、永井香美「墳墓の現代的意義と形態の多様化」。十分ではないもののアイヌ詩歌資料の一部収集がなされた他、現在マスコミを通じて流布されている霊的存在の流布とその問題点、フィールドワークを通じ地域に根ざす民間信仰の現在の意義、現代の魔女宗、葬式の高額化・少子化に伴う無縁墓の問題について、自らの興味に基づく活発な議論がなされた。

地域環境学グループ

土岐亮介「ボクシングにおける減量についての一考察ー事例研究を踏まえて」：

ボクシング等の格闘技の歴史に触れた上で、階級性スポーツと減量の意義について述べ、自身の体を使って減量の影響を具体的に把握した。

畠山純一「アメリカにおける環境思想の変遷と現代環境映画の表現形態に関する一考察」：ジョンミュア等のアメリカにおける環境思想の変遷について触れ、同時に「不都合な真実」等の現代環境映画の思想と通じる点の指摘を模索した。

森麻里亜「我が国および北海道内における公害問題の歴史的展開に関する一考察」：宇井氏の著作について触れつつ、水俣病・足尾鉍毒事件や道内の旭川パルプ工場汚染問題や栗山六価クロム問題について具体的に述べ、公害を現代の視点でどう継承すべきか指摘した。

福祉・社会教育分野 福祉グループ

本年度は、福祉政策研究室から「女性障害者のQOLと月経ケア」、「北海道におけるバブル経済と北海道拓殖銀行—下位都市銀行の焦りと破綻—」、「癒しと医療の関係—代替医療の可能性を考える—」、「障害者の性の選択制」、「アロマセラピーの歴史と展開」の5編が提出された。また福祉教育の研究室からは「障害者のスポーツ支援充実を目指して」、「聴覚障害者のスポーツにおける特別な配慮点について—聾学校体育授業の調査から—」、「視覚障害者の旅行での問題点と課題」の3編が提出された。現代的課題をテーマにそくして、多様な視点から考察するものや、福祉現場や障害当事者の生の声を聞き、考察を深めた研究など、今年も卒業研究にふさわしい力作がそろった。

〈生涯教育課程〉

生涯スポーツコース

「高校サッカー選手における心理的競技能力についての一考察—競技経験・競技経験年数・ポジション・競技成績からの分析—」（森野 渉）、「バスケットボール選手における日常場面と競技場面における攻撃性の関連についての一考察」（山田 寛）、「中学校・高等学校における体育授業の目的に関する意識調査—教員養成系大学の保健体育科教員免許取得予定学年に焦点を当てて—」（福士香奈子）、「地域スポーツとソーシャル・キャピタルに関する一考察—北海道夕張郡栗山町を事例として—」（三鍋健太）、「運動部活動における専門種目外の指導者と競技者の実態—中学校年代の運動部活動における指導者の専門性に着目して—」（設楽勇介）、「バレーボールのブロックジャンプにおける2種類の跳躍方法に関する研究」（高田朋子、野原あずさ）、「中学生期における反社会性行動とヘルス・ローカス・オブ・コントロールとのかかわり」（佐々木亮）、「大学生におけるセルフエスティームと摂食障害のかかわりについて」（児玉風子）、「投球間のアイシングがパフォーマンスに及ぼす影響」（小西秀明、渡辺倫之、岡野茂文）